

座談会

若い教員の生活と意見

— 幼・小・中・高 —

編集部

教師の不祥事が、紙面やテレビの画面を賑わし、いわば「教員バッシング」がやられていると言ってもいいほどです。日常接している先生方ははじめで、いつも忙しそうです。

若い先生方の本当の声を聞きたいと、鈴木（幼稚園）、田中（小学校）、佐藤（中学校）、野原（高等学校）の各先生方に出席していただき学校における生活や意見を話してもらいました。今の厳しい事情からどこの学校かを特定できないように、配慮してまとめました。そのために具体性不足の恨みがあります。司会は四〇歳代の現場の教諭です。

一、わたくしの職場

司会 自己紹介を兼ねてはじめて今の状況を順に話してみてください。

鈴木 幼稚園の五歳児の担任です。子どもたちの変化がよく見えます。親もわたしと同じ年代に入ってきて、親の変わりようも目につきます。一言で言ったら、親子とも自己主張が激しくなってきた、ということなんです。自分のことだけいって、ほかの意見に耳をかきない感じです。

田中 小学校の二年生担任をしています。大きな学校で都市部と農村部を抱えた学区で、今日のすべての問

題を背景に持った子どもたちと見えています。

佐藤 今の学校に来て数年目で中三の担任で、多忙と緊張の毎日です。農村と都市や観光地の性格もある複雑なところですよ。従って子どもたちは多様でいろいろな問題を抱えています。

野原 高校で歴史を教えています。皆さんと同じ多くの問題を持った生徒を相手に苦闘しています。高校生はやや大人に近いですから、教える楽しみも感じつつ接しています。

司会 多忙と子ども・親の変化、それに対する学校のシステム（仕組み）の問題を中心に話し合っていますか。

二、なぜ超多忙なの？

佐藤 友人の大きな中学校に勤務の例ですが、今日もここに出席したいと言っていたのに土曜出勤。深夜十二時過ぎまで学校にいることはざらだそうす。校長が県の校長会の高い地位にいて、いわゆる地域の中心校としての仕事がとても多い、と言っていました。

田中 大きな学校に転勤して、六学級のところよりは多くの仕事があると実感しています。あまり人数が多

くては、小学校としての機能が落ちると思います。各学年の児童数が多いのでわたしが所属する学年の子どもも達さえ、顔と名前が一致するには接触する時間が必要なのにその機会が不足です。

野原 高校は数百人規模が普通ですから、そういうものだと思っていました。教えていないクラスの子どもは顔も名前も分かりません。小学生よりはずっと自立度が高いからいいでしょう。

鈴木 幼稚園が忙しい理由は、子ども達から目がはなせないという発達段階の特性と社会性が非常に弱い子どもが増えているからではないかと思えます。たとえば、自分が気に入らないとすぐに「ぼくかえるよ」と帰ろうとする。親も同じで視野が狭い。わが子のことを必死に代弁すると言う姿によくぶつかります。

親との関係では園でわが子に何かあった場合、担任に言わずに園長に言う。かえって解決が難しくなることがあります。母親はそれぞれグループを作って、それ同士が対立している。それが子どもをも巻き込み「あの子とは遊ぶな」なんて。

田中 親とのかかわりでトラブルに遭うのは、小学校も同じです。母親はわが子の言うことだけ信じて、き

びしくいつてくるというのが普通になって、公共の視点がなりたいです。その言われてくることに教頭・校長などはとても気を使って振り回され、処理してくれない。ストレスがたまります。

佐藤 わたしのクラスのある保護者も職業柄か自分も教育者だとばかりに、子どもの情報をもとにパンパン言ってくるのです。いろいろ試みてもうまくいかないので校長に相談したら、君がすべて段取りをして、校長は一言いだけで済むようにしておくように、といわれて「そういかないから相談しているのですしょう」と大きな声を出すところでした。管理職らしくやってみてほしいと切望します。

司会 システムの問題だといえますが、中学一年生が小学校の習慣を引きずってなかなか適応しない。たとえば授業中のトイレです。小学校でモジュールといって一五分分钟みの授業活動では、移動のときなどに自由にトイレに行っていたのです。五〇分の中学の授業に耐えられないで、トイレを息抜きや遊びの場に使おう。注意すると、「お前なんか死ぬ、どっかへ行け」などと毒づく。あるいは「分かった」といって逃げていく。幼稚な自己中心的な反応に子どもらの変化を感じてい

ます。「中一ギャップ」と呼んで指導をいろいろ試みているところです。小学校ではいかがですか。

田中 最近、六年生の習熟度別クラスの研究授業を見ましたが、その時間はつまづいた子にばかりきりで、一問だけしかやらない、他の九人の子どもは退屈そうでした。その授業のねらいが分かりませんでした。

野原 高校生でも今年の新入生のオリエンテーションで、その口のきき方にびっくりした。先生に対して「おい、これ〇〇〇〇なんだか」とまったく友達同士の言い方しかできない。低学力と正比例的な関係にある。大きく言うとい極化しているといえる。一つは学力があり、分かる子。他方には低学力ですであきらめている子。テストの時間も遅れてきて何も持たず、「ペン、貸して」と。「どうしたの」と聞くと、「どうせ分らない、名前だけ書く」と終わりのベルを待つ。それでも何らかの接触を求めるのはまだいい。「生きていてもしょうがない」というのがいて憂慮しています。

佐藤 中学生にも似た傾向があります。先生の板書を余さずノートして、ジョークまで書く子、他方に「先生書くんですか」と聞く子。自分で判断しない子が心

配です。

田中 小学校も同じです。背景には家庭の事情が大きいと見えています。たとえば、諸費用の滞納で、給食費などは多額ですから、たまるど容易に払えません。学校は企業のように取り立てませんし、最後にはどうするのでしょうか。

他方で早くから、塾へ行かされて親の期待に応えるために耐えている子もいます。そのプレッシャーに耐え切れず、壁に頭を打ち付けたり、教師の机からペン、付箋などどったり、と妙な行動をします。

鈴木 幼稚園の年長組のある子もそうなのです。わたくしの机の中からマジックペンなどを取っていき、自分のロッカーに入れておく。聞くと「知らないお兄ちゃんがペンをとって、遊んでいた」なんて物語をつくる。父さんがとても厳しいしつけをしている家で、関係があるとみえています。ストレスから来るのでは？

司会 幼稚園から小学校への連絡や連携は、形式的になっていませんか。小学校から中学校へも同じ傾向です。中学校から高校は入試と内申書で合格か否かが絡まる関係で、入ってから本音の連絡が必要でです。子どもの最善の利益になるような実質的な中身があるもの

が求められています。

鈴木 最近では軽い発達障害が目立っていますが、就学委員会はID（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）などは判断できるのででしょうか。

司会 専門家がいないとやれないでしょう。難しい判断ですから。

田中 クラス内にもそういう障害がある子はいると思います。誰が判定し、どう対応していくかは、難しい問題でとても多くの研修が必要だと思います。

佐藤 中学校では思春期の動揺が激しい成長期で、個性が進みます。常に勉強が求められているのに、十分な時間もお金も保証されていないと思います。

野原 それは高校も同様です。授業だけやっていればいいというわけにはいかない状況が仕事を複雑にしています。生徒指導の問題が多発しています。

司会 軽度発達障害の問題ひとつとっても、定員を増やさなければならぬ位なのに、そうっていないところに超多忙の根源がありますね。

三、子どもらの変化の背景は？

野原 なぜなのかまだ良く分からないが、伝統が生き

てこない。数年前は通じた行事の意味や伝統が無力になつていると感じています。

司会 中学も二学期に球技大会、合唱コンクール、文化祭などをやり遂げて、それをバネにして受験勉強に切り替えていったのが、そうはいかなくなつた。仕組みとの関係で言うと、高校受験の推薦制が影響している。生活態度がよくない生徒もスポーツが優れた成績だと合格できる。しかし、ある中学校のスポーツ選手は他県からスカウトされたほどだったのに、その話の後で非行をやつてしまった。さっき二極化の話が出ましたが、低所得の家庭の子と保護者に過大の期待をかけられた子と、その中間に目立たない普通の子といわれる層がある。どの層も変化している。

鈴木 先に言いましたように、ストレスの多い子は吐くまねをしたり、ウソの話をしたり、ウソが多いのです。わたしたちは「自己防衛のウソ」といっています。たいてい家庭の重圧が見えてきます。早期の勉強の押し付け、母子・父子家庭の環境などです。

司会 八〇年代の初めごろの生徒は、非行をやつて先生にきかれても仲間を言わない。いまは「あいつ」も「あれも」いた、オレだけじゃないの態度です。親の

年代は高度経済成長期の「星飛馬」のスタイルの頑張れば何とかなるでしょう。「俺のやつたように頑張れ」と。

佐藤 それがストレスになつている例はよく見られます。また、「テストでいい点を取ったら〇〇円あげる」というようにエサでつるのがありますよ。そんなやり方が子どもたちをだめになっていると思います。

田中 背景には親の生活の変化があるとは頭で理解しますが、実際にはその生活を知っていないのです。そんな自覚があり不安です。

野原 僕はあなた方よりは長く教員をやっているけど、そのとおりで保護者の生活はよほど努力しないと分からない。ある程度分かるのは労働組合の役員として、他の職種の組合と接触するなかでいろいろなることを知りました。サービス残業など。

田中 組合なんて分会会議(職場の組合員の会議)さえ、ここ何年ありません。多忙で集まって話すことが困難ですし、役員になる熱心な人もいないようです。

佐藤 わたしのところも似たような感じですよ。

四、学校の人間関係はバラバラ

司会 校長の役割が学校では大きいのですが、きちんと役目を果たしていますか。

佐藤 役所からの通達などは、一字一句読みますから、職員朝会が長びいて一時間目の授業に食い込むことがあります。なんでも文書にすることにこだわり、形式が少しでも違っていると何度も直させるなどで、校長の仕事って文書管理かと思うくらいです。一番不満なのは、子どもの指導には腰がひけていて、こちらから相談しても頼りにならないことです。

野原 いい意味のリーダーシップを取らないのはわたしのところの校長も同じです。大規模な高校ですから、副校長と教頭もいますが、長年の伝統の力や組合の力もあって、上からの強制は出来ません。それはいいのですが、教科ごとにまとまり過ぎて学校全体の教育活動が弱い、と言えます。教科担任制から来る弱点でしょうか。いわゆる進学校では先生が教科準備室に閉じている、と聞きました。

佐藤 校長だけではなく、子どもの指導から腰が引け

ている教員がいます。中学生は掃除をサボりたがるのです。サボっているのを見ても見ぬふりか、形式的に注意するだけで、はがゆくなります。それをいえる場がないのもストレスになります。

田中 とにかく同学年の先生方と歩調をあわせていくの気がつかって、授業をやっていくのが精一杯の気持ちです。他学年の同僚と話す機会など本当に少ないのです。バラバラになるのは不思議ではないでしょう。忙しさを何とかしないとだめです。

司会 先生方を三つのタイプ(型)にみています。一つは、体当たりに生徒に向かっていく人。二つは、適当なところで妥協しながらやっていく人。三つは、割り切って自分の生活を最優先する人。二と三は女性の経験豊富な先生に多いようです。学校の努力に限界があると一種の諦めでしょうか。

五、仕事の喜びはどんな時

司会 どのようなときに、教師の喜びを覚えるかを聞いてまとめましょう。

野原 わたくしが接した二年間に、「きょう掃除はあるんですか」と「テストはいつからですか」の二回だ

けしか声を聞かなかった〇〇君が、卒業してある簿記専門学校に行き、簿記一級試験に受かった、とVサインして笑っている写真入の手紙をもらったときは、ジーンときました。それまで笑顔を見たことがなかったのです。学校にいる時の成長に急激な変化がなくても、その後期待できるのだと思います。

佐藤 卒業式で名前を呼ばれて大きな声で答えているのを見るだけでも嬉しいです。わたしが叱ったのに反撥する生徒を見ていた他の子どもが先生が正しいとフオーロしたりする時も勇気付けられます。親が文句を言ってきたときも当事者の子どもが、先生はきちんと説明していたと評価するときなどです。

鈴木 幼稚園児は、言葉で確認は出来なくとも通じ合ったなと感じるときが喜びですね。

他の先生が出張で代わりに授業したときに絵本を読んでやり、終わりにダンスにしたら、その輪の中に入れという。そんなときは幸せです。

また小学校へ送り出してからも「鈴木先生、お元氣」なんて言ってくる子がある時も。

田中 個別懇談会で、母親から「うちの子が先生にほめられた」と何度もいって元気になっていると聞いた

とき、それほど効き目があるのかと驚きました。「アヤちゃんの姿勢、とってもいいね」と言っただけなのに。他の例ですが「ノートがともきれいに書けているね」とほめたのも後々までその子の励みになったと聞きました。クラス単位でも成績が漢字書き取りや算数の計算力などで上がると、子どもも素直に喜びますし、担任として嬉しいです。

司会 忙しい中ありがとうございました。課題は多いですが、若さでいろいろと挑戦してってください。きょうの話し合いが参考になればと思います。

